
Cover note

リスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o v e r n o t e

【Nコード】

N 7 6 9 2 Q

【作者名】

リスト

【あらすじ】

これはひとつの物語です。
本が描くストーリー。

Cover note : 1

私には宝物がある。

それは一冊の古びた本。

昔、とある人から譲り受けた大切な物だ。

中には何も書いていない。

真っ白な空白のページが延々と続く。

しかし、私には見えるのだ。

ここには確かにひとつの物語がある。

17歳、高校三年生。

私立学校に通う私は毎朝電車を経由して登校している。

5時起床、6時発の電車に乗って一時間の旅を楽しむ。

いや、もう二年間も同じだと楽しむ風景なんてなくなったけど。

今日はやけに人が少ない。

通勤ラッシュと呼ばれる日本の朝は

こんなにも静けさを生むものではなかった気がするけど・・・

それでも見渡すと10人くらいは居た。

そこで右ポケットから振動が伝わる。

私は右手をポケットに伸ばして振動する物体を出した。

『着信あり：アキ』

サブディスプレイに表示された文字。

右から左へと流れていく。

時刻は朝の6時20分。

ああ、これってまさか。

「ごめん！今日学校休みだつて伝えるの忘れてた！ほら、ミナの連絡網って一番最後じゃない？そして私ってその前じゃない？さらに私って忘れっぽいじゃないっ？だから、連絡も忘れてたっていうかさー、しかもミナっておばあちゃんっ子じゃない？やっぱりご老体に夜中電話するのは気が引けたり引けなかったりー」

「うん、アキ、分かったから。要するに今日は学校休みってわけね？」

「う、うん。そうそう、なんでもインフルが蔓延してるだとかで」

「ふうん、最近少し肌寒くなってきたからね」

「とにかく本当に、ごめん！」

「うんうん、分かったから。電車内だからもう切るね」

「うん、じゃあまた来週ねっ」

ツーツー。

虚しい音が耳に伝わる。

ふう、とひとつため息。

今日、休みなのか。

じゃあ、急に暇な休日に早代わりしてしまった、というわけか。授業を受けていても退屈なだけだけど。

「どうしよう。帰るにもあと30分はかかるなあ」

一人呟いてみたが周りには聞こえていない。

もちろん聞こえるような声では言っていないのだけれど。

そのままどこかに行ってしまうおうかと思っただけど、

制服姿でどこかへと降りるのは気が引けたので戻ることにした。

そして駅を降りようとしたとき。

シートに一つのノートが置いてあることに気づいた。

「・・・誰のだろう」

拾いあげてみた。

表紙にはCover noteと書いてある。

普通のノートよりもやや小さく、紐で容易には開かない作りになっている。

カバンとかに入れやすそうだし、使い勝手がよさそうなノートだと思う。

しかしなんだろう、ひどく懐かしい感じがしてならない。

本には表、裏、ともに名前は書いていない。

それもそうか。

名前を書くなど、こういうノートにはしない。

中は・・・見るのはさすがに駄目だろう。

なんだかこう、道徳的に。

『ドアが閉まります。ご注意ください』

アナウンスがホームに響く。

やばい、早く出ないと。

いつの間にかに電車はホームに停車していたようだ。

私は慌ててその空間から抜け出した。

駅へと走り出て後ろを振り向くと、電車はさっと視界から消えた。

手には茶色のノートが一冊。

持ってきてしまった。

どうしよう。

「ここで待つてたら探しに来るかもしれない・・・」

淡い希望だったが、どうせ今日は学校がないし暇だから待つてみることにした。

駅のホームにあるベンチで30分は待ってみたが
誰も探しに来る気配などなかった。
もう、駅に届けておこうかな、と思ったそのとき。

一人の男の人が辺りを見回しながら駅を歩いているのが見えた。

Cover note・2

「あの、これをお探しですか？」

私を意を決して話かけてみた。

おそらく同年代なのだが随分と小柄である。

背は私よりも頭半分くらい高いのだが

肩幅がそれほど広くなく、小さいという印象が得られる。

薄手のパーカーを着ていて、その下にはドクロのロゴがプリントされたTシャツ、

そしてジーンズを履いてる。

いまどきの若者だな、と歳に似合わない評価を下したところで男の人は私を見て言った。

「あ、ああ、うん。それだよ、ありがとう。えっと、これはどこに？」

「電車の中で広いました。シートの上に置き忘れてたみたいですよ」

「あー。あの時か。そっかそっか。うん、そうか」

一人で目を瞑り回想しながらうんうん、と頷いている。

どうやら何かをしていたときに電車の中に落としたみたいだ。

しかし、ノートなど落とせるのだろうか。

「いや、君。ありがとね。えと、そうだな、これから学校？」

「あ、いえ、学校はありません。急に休みになってしまったので・・・」

「そうなんだ。ん、そうだな、じゃあちょっと今から行くところに一緒に来ない？」

え、これって所謂ナンパとかいうやつじゃないのだろうか。
人生初ナンパ。

本日二度目のどうしよう。

こういうときアキならほいほい付いていくんだろっなあ・・・

「あ、別に怪しい店とかじゃないから、安心して」

「はあ・・・」

結局私は付いていくことにした。

ここらへんの地理は大体知ってるし、

まあ、いざとなったら逃げられるかな、と思って。

それに何だかこの日を境目に私の世界とかそういうものが
変わりそうな気がして。

少し、大げさすぎかな。

疑り深い上に少し変人な気がするなあ、私。

駅の改札を出て交差点を右に曲がり、

道沿いをまっすぐ歩いていく。

T字路に当たって左に曲がり、また道なりに。

そして何も無い路地に入って行き、

人の気配がしないところまで連れて来られた。

これはもしかすると、もしかしないでもやばいのでは。

「あの・・・ここに何かあるんですか？」

「ん、もうすぐだよ。ほら、見えてきた。」

曲がりくねった少し細い道を進んでいくと

その先には広場が待ち受けていた。

円状に広がるレンガ造りの地は

ここは日本ではない、ということを高らかと謳っている。

どうやらここは四方から来ることができる造りらしい。

正面、右手、左手、そして私たちが来たところ、

この四箇所からこの広場に来ることが許されているようだ。

そして真ん中にはこれでもかというような存在感を放つ

大木が一本、というよりひとつそびえ立っていた。

「すごい・・・」

思わず感嘆の言葉が漏れる。

この情景を見て言葉を発さないのは

ひねくれ者が古参者くらいだろう。

動物だってこの広場にすればついついはしゃぐだろう。

そんな空間である。

「どう、すごいでしょ。ここ、お気に入りなんだ」

男の人はそう言う真ん中の木を囲むようにして

作られているベンチに腰をかけた。

私もつられてそこに座る。

「この木は” はじまりの木 ” って呼ばれてるんだよ。なんだかつ
こいいよね」

「はじまりの木・・・」

江戸時代の初期頃、この木はある百姓が植えたものである。

その百姓が暮らす村はひどく貧困で

米も野菜も十分に取れず、よく災害に見舞われていた。

そこで神を宿すものとして植えられたこの木は

村が貧困や災害を避けられるようにと願いがこめられ、

村の民はお供え物を捧げて自らの希望を形取っていた。

しかし願いが通じたのか、その木を植えた翌年から村は災害に見舞われることは少なくなり米も野菜も安定して取れるようになってきた。そしてその木が植えられて幾年が経ち、誰が呼んだかは知らないがいつしか”はじまりの木”と呼ばれるようになった。――らしい。

「よく、そんな話知ってますね」

「はは、おじいちゃんが昔よく言ってたんだよ」

私はそつと大木に手を触れてみる。

ずし、つと重く、そしてでこぼことした感触が何故か懐かしさを漂わせる。

こんなになるまで、一体どれほどの年月が……。

「この本」

「え？」

私は不意をつかれた。

木に触れていた右手をさつと引つ込める。

別に責められてるわけでもないのに。

「あ、えつとね、この本。そう、君が見つ付けてくれた本なんだけど」

「はい」

「これ、中身見た？」

「あ、いえ……見てはいけなかな、と思って見てません」

「うん、君はいい子だね。じゃあ、特別に見せてあげよっか」

そう言つて男の人はCover noteと書かれた本の紐を解い

てみせた。

中身をめくってまず一枚。

そこには真っ白なページが広がっていた。

「え、何もありませんよ?」

「そう、君には何も書いてないように見える?」

「・・・?」

「僕にはたくさん書いてあるように見えるなあ」

そう言つて男の人は少し微笑みながら

真っ白なページをぱらぱらとめくってみせる。

しかし黒いインクの跡は一向に見えない。

「私には白紙にしか見えませんが・・・」

「んー、そっか、それもそうだね。これは君のじゃなくて、僕のだ。そう、僕の」

そう言つて最初のページまで戻り

本を閉じて紐結んだ。

左右バランスの良いちょうちよう結びだ。

几帳面なA型だと自己分析で判断。

「そうだな、じゃあ、明日またここに来れる? ちようど土曜日だし」

「え、えっと・・・来れますけど」

「ん、じゃあ、決まり! 明日またここに来てね」

そう言つて男の人は立ち上がり

大木の後ろへと歩む。

「あ、名前とか聞いても・・・」

と言ってみたが誰もそこにはいなかった。

広場に少しだけ私の声がこだまする。

この日A型プラス足が速いという情報しか収穫はなかった。

そして結局制服姿で移動したことに少しだけ悔やんだ。

Cover note・3

翌日。

そういえば時間帯を決めていなかったことに気づき

私は昼過ぎに電車に揺られていた。

時刻は15時。

いくらなんでも遅過ぎるだろ、

と自分にツツコミを入れてあげたい。

そんな衝動に駆られていると電車は私の体を

昨日の駅へと運んでくれた。

そしてそこには彼が立っていた。

「あ、こんにちわ。いや、昨日はごめんね。時間教えずに帰っちゃ
って」

「どうも、こんにちわ・・・」

え、まさか朝からずっと待ってたのだろうか。

いや、さすがにそれはないか・・・

「ん、じゃあまた昨日のところに行こうか」

そう言つて彼は歩き出した。

昨日と変わらない素振りだ。

私もまた彼に付いて行く。

昨日と変わらない素振りだ。

思っていたよりも随分早くこの広場に着いてしまった。

一度ここへ来たからだろうか。

もうすでに懐かしい感じがする。

「えっと、今日はね、これを君にあげようと思って」

そう言つて彼は一冊の本を取り出した。

昨日とまったく同じ本、

表紙にはCover noteと書かれてあつた。

「これって、昨日と同じものですか？」

「そうそう、一緒。というか、昨日のやつだよ」

「え、これって探すくらい大事なものなんじゃ・・・」

「いいのいいの。それはもう、僕には必要ないから」

必要ない？

どういう意味だろう。

「どう？今日は中身、見える？」

そう言われて私は紐を解き明かす。

そして表紙を開き、中身をばらばらとめくる。

今日も真つ白だ。

一体何が見えるというのだ。

私は首を横に振った。

「そつか。うん、そうだよ。でもたぶんこれから見えるようになるよ、きっと」

「これから・・・ですか」

「うん、これから」

彼は大木に触れながら笑つた。

なんとも無邪気な笑顔だった。

私もあんな風に笑える日が来るのだろうか。

いつか、迎えられてたらいいな。
うん、夢だけど。

「そうだね、ひとつ、物語を語ろうか」

彼は天を仰ぎながら誰かに向けて言った。
私だったかもしれない。

それは彼にもわからないだろう。

「昔、一人の男の子がいたんだ」

その子はひどく病弱で、外で遊ぶことが許されない体だった。
だから友達も少なく、一人孤独だった。

そんな姿を見兼ねた母親は父親の転勤を機に引越しを決意したんだ。
我が子に友達ができますように、ってね。
でも引越した先でも友達はできなかった。

それどころか環境が変わったせいでますます体は悪くなっていったんだ。

そんなとき、母親の手に連れられて家路を辿っていたんだ。

『ママ、今日の晩御飯、なーに？』

『んーとね、今日はからあげよ』

『わーい！からあげ大好き！』

そんな会話をしていると前から女の子が来たんだ。

その子も両親に手を引かれて、帰っている様子だった。

そこが初めて男の子がその子に会った日。

たぶん女の子は覚えていないだろうけどね。

数週間経ったある日、

男の子は体調が優れていたから大好きな本を母親と一緒に買いに行
ったんだ。

するとそこにはあのときの女の子がいてさ、

親はなにやら本屋の前で世間話に花を咲かせてるんだ。

だから、男の子は女の子と一緒に本を見て回ってた。

そこで見つけたんだよ、その本を。

二人は少ない小遣いを持ち合わせて本を一冊購入した。

その思い出は男の子にとつてとても大切なものなんだろうね。

それから何回か遊んだんだ。

ここにも来たことだつてある。

そしてそこでの約束もまた、男の子にとって大事な思い出に・

・

ズキツ、と頭が痛みを帯びた。

なんだろう、この痛み。

そして彼の話・・・

どうも他人事には思えない。

「あの、その男の子は一体どうなつたんですか？」

「ああ、今はもう元気だよ。ちゃんとした生活も送れてる」

そうなんだ。

と心でつぶやいてみたが、なんだか腑に落ちない。

なぜ彼は私にこんな話を・・・？

「えっと、じゃあこの本がその子たちの買った」

？

あれ、待って。

この本、見たことが、ある。

どこかで、見覚えが・・・

「・・・思い出した？ミナトちゃん」

「!」

頭の記憶を司っている部分が衝撃を受けた。

ズキツ、というよりも、パリン、と何かが割れる感じ。

しかし、そこから湧き水のように昔の記憶が流れ込んでくる。

また、脳内に物語を語りかけられているような。
そんな錯覚。

Cover note・4

「あたし、ひいらぎみなど!」

「ぼくはさかきりよう!よろしくね!」

とある本屋で元気な挨拶を交わす光景が見える。
まだ小学1・2年生と言ったところだろうか。
しかも、女の子は私に似ている。

「あ、みてみて!このほん、かつこいいよ!」

「うわっ、ほんとだあっ」

無邪気に本に夢中になって。
一体何の本だろう。

「んーと、んー・・・」

「なんて読むの?」

「わかんない!でも、ふたつでひとつってかいてる」

「ほんとだっ、ふたつでひとつってへんなほん」

あの本って・・・

私がさつきもらったばかりの・・・

そして一転してフラッシュバック。

世界は夕日を背負い、舞台は見覚えのある広場へと移された。
ベンチには子供が二人、小さな手には少し大きい本を抱えて座っていた。

「みなとちゃん!またあえたらぜったいあそぼうね!やくそく、わ

すれないでね！」

「うん、うん、ぜったいわすれないっ！ほんも、まいにちみるからっ」

女の子は泣きじゃくっている。

男の子も必死に涙を堪えているみたいだ。

そして二人はベンチを離れ、

男の子は右へ、女の子は左へと歩みはじめた。

広場には少しの温もりと反響する二つの子供の声が響いていた。

また一転して今度は暗闇の世界。

視点は車の中。

外は雨降り模様でワイパーが働いている。

どうやら家族で外食にでも出かけているらしい。

父親が運転をして、母親は助手席に、そして女の子は後部座席に。

すると前方から眩いばかりの光が飛び込んできた。

そして。

キイイイイイイツ！！

ガシャンッ！！

一転。

比喻ではなく。

車は対向車線と正面衝突をなし、そのままひっくり返ってしまった。

双方の車とも無事ではない。

フロントガラスは無残にも割れ、ボンネットは原型をとどめていない。

外から叫び声や助けを呼ぶ声が聞こえてくる。

女の子は意識が遠のき、世界は閉じられてしまった。

目を開くとそこには天井があった。
白い壁。

見たことのない部屋。

そして隣にはおばあちゃん。

「ああっ！先生！先生っ！ミナトちゃんがっ！ミナトちゃんが目を
！」

おばあちゃんは顔をくしゃくしゃにして
涙を浮かべて先生と呼ばれる人と呼ぶ。
そんなに叫ばなくてもいいのに。
と、当時の私は思ったのだろうか。

——そう、これは私。
紛れもない私の記憶。

今まで明かされることのなかった、記憶の欠片。

「ショックによる記憶喪失かと思受けられます」
「記憶喪失っ……………先生、それは治るんでしょうか……
？」

「いえ、治すのは困難だと思われます。しかしミナトちゃんの場合、
失われた記憶は事故以前半年くらいの記憶なので、むしろ幼いミナ
トちゃんにとっては幸いなのかもしれません」

記憶喪失。

だからこのことを私は知らなかった。
両親は事故死だとおばあちゃんから聞かされていた。
たしかに事故死だった。

でも、まさか私も乗っていたなんて・・・

Cover note・5

「ん・・・」

あれ。

私、いつの間に寝てたんだろ。

ベンチに横たわって、変な夢見て・・・

いや、夢なんかじゃない、あれは私の、過去。
記憶。

戻った、うつん、思い出したんだ。

「っ？」

辺りを見回したがそこには彼の姿はなかった。

昨日と同じく忽然と姿を消していたのだ。

まだ、聞きたいことはたくさんあったのに・・・

「Cover note・・・」

あの約束とは一体なんだったんだろう。

本当にまた遊ぼう、ってそんな単純な約束だっただろうか。

私は持っていたノートの紐を再び解いた。

白紙のページをめくって、めくって、
しかし何も無い。

ひらり

と一枚の紙が落ちた。

こんなもの入っていなかったような。

拾い上げてみるとそれは新聞紙だった。
とある記事の切れ端で、見出しは

『乗用車二台が雨天スリップ
親子計五人が死亡、一人女の子が意識不明の重体』

と書かれていた。

もう古ぼけていてすこぶる読みにくかったが
その記事の詳細にはこう書いていた。

『――坂城 大介（34歳）さん、坂城 麻奈（32歳）さん、
坂城 遼（8歳）くん、柊 静雄（29歳）さん、柊 美香子（2
8歳）さんが死亡、柊 実水（8歳）ちゃんが意識不明の重体に陥
っており、回復の――』

思考が停止。

視界が眩む。

思わずベンチから体が浮く。

手から新聞紙の切れ端がするりと落ちる。

地面に落ちた音が耳に聞こえるほど辺りは静かだった。

風さえない。

大木も揺れず、じっと私を見つめている。

『ぼくはさかきりょう！よろしくね！』

”夢”で聞いた台詞がリフレインする。

坂城 遼。

交通事故。

さかきりょう。

こうつつじこ。

あのときの対向車線からぶつかってきた車。
おそらく雨でスリップしたであろう車。

あれは。

遼くんの車だったのか。

脳がしびれている。

何も考えれない。

このまま卒倒してしまっても誰も文句は言えないだろう。
しかし、私はベンチに座りなおして思考した。

思い出せ。

あのときの約束を。

きっとそこに答えがあるはず・・・

辺りはもうすでに夕闇に包まれていた。

Cover note・6

午後7時。

その日、家へと帰りついた私はご飯も食べずに

昔のダンボール箱を漁っていた。

結局約束は思い出せなかったが、

ひとつだけ思い出したことがある。

それは遼くんだけではなく私も本を所有しているということ。

きっと私はそれを持っている。

見つけれれば何か思い出せるかもしれない。

ダンボール箱の中には古く痛んだ子供服や中学のときの制服、

さらには体操服やらがでてくる。

ここは衣服とか入ってるのか、と思って次のダンボール箱を開けようとしたそのとき、

「あ・・・つた・・・」

ひとつの箱を見つけた。

何の箱かは知らないが、表に

『たからばこ』

ともむしが這ったような字で書かれている。

幼いころに書いたのだらう、今見ると少し恥ずかしい。

そしてその埃かぶった箱を開けようとしたが、なぜか少し不安になった。

この中にきつと・・・

おそろおそろ箱をそつと開けてみる。

するとそこには一冊の本があった。

『Cover note』

と書かれている。

しかし私が譲り受けたものとは逆で
右からめくる仕様になっている。

「Cover note・・・」ふたつでひとつのほん」

私は言葉を復唱しながら両方の本を掛け合わせる。

そして中をばらばらと。

昨日、遼くんがしてみせてくれたように。

そっか。

そういうことだったんだね。

遼くん。

また、遊びたいな。

ふたつでひとつのほん。

C o v e r n o t e 。

それは片方は真っ白に、片方は真っ黒に塗られた
ページを掛け合わせることによって

メッセージを書くことのできる本である。

黒く塗られた方のページを切り抜いて

白いページに合わせれば、字が浮かび上がるということだ。

そして幼い私たちはこう書いた。

『こ　ん　ど　あ　っ　て　も　と　も　だ　ち』

本にそつと涙がこぼれた。

慌てて拭いた。

しかし涙は頬を伝うことをやめない。

本を閉じて私は天井を仰ぎながら泣いた。

遼くんはもういない。

あのときの約束は、果たせない。

だけど、だけど。

涙はとまらない。

時もとまってはくれない。

まして戻ることなどあつてはならない。

だけど、一度だけ願うことが許されるなら、

私はもう一度あなたに会いたい。

それくらい許してくれてもいいじゃないですか、神様。

涙はいつしか雨に変わっていた。

あの日のような強い豪雨と成り果てた。

C o v e r n o t e ・ 7

あれから。

私は定期的に大木のある広場へと足を運んでいる。

それは彼に会えるかもしれない、という淡い期待を抱いているものもほんの少しだけあるが、本当の理由はそこにはない。

ここは私の” はじまり ” なのだ。

そしてこれは” はじまりの木 ” ではなく” はじまりの本 ” 。

とても大切なもの。

だから私はここに来る。

大切なものを確認するため。

遼くん、聞こえますか。

私はもう25歳になりました。

もう子供もいるんですよ。

元気なお母さん、しています。

あなたみたいな素敵な笑顔、作れるようになれましたよ。

そちらはどうですか。

ちゃんとご飯、食べてますか。

そっちの世界はどうなのかは知らないけれど、

またいつでもこちらにきてね。

歓迎するよ。

君の大好きなからあげ、作ってる待ってるから。

またいつか、会おうね。

ばいばい。

私は顔の横で手を少しだけ振り、
踵きびすを返して子供の手を引き連れてその場を後にした。

季節は春。

そよ風に靡なびく大木は

まるで遼くんが元気に返事をしているかのようにだった。

Cover note・7 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。
本が描くストーリー！。

二人の間にはいつまでも本という絆でつながっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7692q/>

Cover note

2011年10月8日13時45分発行